

梅屋病課

544
八
14 ₇₈

0

150 cm

10

SEKISUI JUSHI

20



梅屋病課序

古人曰詩貴興象也興觸感發焉而夫所以其感者也不緣困苦憂戚者矣若唐詩賢或竄逐或疾病之人也而成此大音循々可觀也

殿下嚮有陰陽之患連延經旬常所直侍者二三尚衣及醫官數輩而已

殿下不堪館內之寂寥哦詩裁和歌尋使羣臣賦所其好也臣得_レ_レ惠恩且久

侍左右時時從側目擊其詩歌記諸簡牘名曰梅屋病課亦以殿下不咎成事云爾

享保庚戌春臣安定敬序

梅屋病課

卧病喜母來並引

己酉杪纔余又抱病至冬未痊暗然卧翫花堂慈母常愁我多病矣聽此病恙無意在居則來訪我我亦每卧病床憶母不止這般亦需一對顏也母想我憶雙心相亨忽然母到何堪此幸歡哉不覺離起病枕把手屈房數時相對氣又無倦慈母解顏說法

引例示我發信心偏賴佛誓矣我聽
高話感此惠恩已忘癯患直如有得
全愈意也曾聽艸山妙子作憶母詩
墨痕未乾母忽來乃誌此喜又賦長
韻余亦雖不哦詎的志母來此歡不
可不記因綴二絕述其思云

其一

梅龍

杪秋勞卧北窓間
窶々閨中一牖閑
憶母題詩艸山意
誰知枕上見慈顏

其二

最識萱親慈又深
病門迎駕想曾參
松江一味需無處
只具雲糜充寸心

十月七日當座寸香をたきし

拙菊句

長茶

花を種しゆくはのふのきもてはむ枝小のるもまこは

全

祥昌

拙はさう香成おのふのきもてはむ枝小のるもまこは

全

信以

初々中に秋の意を感ずるや松をよわむるも菊の花

全

通敬

百々の花ももつと秋のうちに日わかかぬもつと秋の意

全

政森

豊より秋の意ももつと秋のうちに日わかかぬもつと秋の意

全

安定

秋の意を感ずるは秋の意を感ずるは秋の意を感ずるは秋の意

全

可明

自なまらう人もあつと秋の意を感ずるは秋の意を感ずるは秋の意

全

露江

々秋の意を感ずるは秋の意を感ずるは秋の意を感ずるは秋の意

燈下觀菊

梅龍

隱逸芳姿隱逸人 幽房一夜護精神

秋光交色竹瓶裏 黃白紫斑映燭新

同

安定

陶潛籬外菊移向燈前見忽被秋風吹

黃雲落片々

同

可明

零落秋風十二欄 江湖雲散月明寒
年々憐爾傲霜雪 爲向燈前子細看

雨庭落葉 長茶

木の葉ももろより外にわらわしとわらわしとさかしたまきものや

全 祥昌

きついでなまこ風をきかぬはるのこころのこころ

全 信以

もろもろとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

全 通敬

唐紙の葉はゆきかへりてはなれぬとて書のしる

全 政森

あまのこころはなれぬとてはなれぬとてはなれぬとてはなれぬとて

全 安定

あまのこころはなれぬとてはなれぬとてはなれぬとてはなれぬとて

全 可明

あまのこころはなれぬとてはなれぬとてはなれぬとてはなれぬとて

全 露江

あまのこころはなれぬとてはなれぬとてはなれぬとてはなれぬとて

全

慈母使女

桃林

花のうしろの好縁のまゝと云ふは竹と花と足すよりよしの雪

發句

使女のこゝろなまをこゝろち〜花のち〜

雪雲をまらち〜なひあ〜なまを〜花

瓜印り仙姫はち〜とや〜雪のまきやま〜牛梅

中国の火〜り宿可せ〜雪のこ〜

ちり雪や皆〜とて〜何〜い〜 蘆雪

ちりゆきやせち〜茅竹のなま〜ほ〜 松花

初山は屋土の六棹〜と二枚肩

ち〜と〜の〜東梅の〜と〜

ち〜と〜に 梅籠

花もかくおち〜ふりの〜雪の〜成る〜木の〜え〜

ち〜梅は〜と〜露江

ち〜ち〜父〜と〜ち〜と〜物も〜す〜

全 安定

ち〜ち〜雪の中〜の〜

ち〜ち〜雪の中〜の〜

いふ理難しし各詠歌を果

雪中雁

梅龍

おちるもこゝろもゆきたうら田鶴は詠にうらむるも人

全

信以

いづくもかたむくゆきとるも成るも雪のまじりたるもあはれ

全

安定

おちるもあはれいづくもかたむくゆきとるも成るも雪のまじりたるもあはれ

全

露江

あはれ林のまじりたるもいづくもかたむくゆきとるもあはれ

雪朝眺望

梅龍

雪霽満山瀑白衣

日弁薨角玉輝

驚風忽拂高標上

數片銀塵埋石磯

いづくもかたむくゆきとるも成るも雪のまじりたるもあはれ

全

露江

おちるもあはれいづくもかたむくゆきとるもあはれ

雪日煮豆腐有感

火燧足温身暖遅

居風呂却氣弁綏

由來斷酒難凌雪

一罌豆麩何若之

雪如松花六物とる食とちて我より初よりあるもいふは

州風醫雪中梅花詩賦下系

とくんそく

寒江風勁雪糝糊 月入凍雲影有無

簾外疎梅花一二 應斯詩興動西湖

梅 安定

無頼寒光日夜催 朔風吹雪入瑤臺

清香不待陽春去 使到隴頭一朶梅

月前水鳥 梅竜

雪さゆふのちの夜の目眩はなほいかにあるやうに

雪月さゆふのちの夜の目眩はなほいかにあるやうに

全 安定

山梨さゆふのちの夜の目眩はなほいかにあるやうに

全 露江

なほいかにあるやうに

又當座和歌

水鳥馴舟 梅龍

なほいかにあるやうに

よきことありてははかばかしくもなほなほとて

全

祥昌

よきことありてははかばかしくもなほなほとて

全

信以

朝の光をみればはかばかしくもなほなほとて

全

安定

あけの光をみればはかばかしくもなほなほとて

全

通敬

あけの光をみればはかばかしくもなほなほとて

全

可明

あけの光をみればはかばかしくもなほなほとて

全

露江

あけの光をみればはかばかしくもなほなほとて

全

芳克

あけの光をみればはかばかしくもなほなほとて

恋長短

梅龍

あけの光をみればはかばかしくもなほなほとて

全

祥昌

亭在寒江上，六花接白濤。煙間飛蝶粉，天外散鴻毛。芝海與雲遠，房山疊雪高。狂風吹暮去，遙見鷺鷗翱。

應

命賦雪中遠望

虛白

朱樓高架海門前，雪滿數峯波底連。欲取總房比三島，月明珠對鶴翩。

我

大君 大夫人館於武江高輪海邊

蓋亭上坐望總房數百里，可謂天下之壯觀也。今茲臣安定奉

嚴命賦其趣云

江亭一上思茫然，雪鎖海門波接天。遮莫潮頭遙入望，總山房水與雲連。

應

命賦高輪 萃館海望 可明

危閣枕江海，唱歌望幾回。僊雲迷舞席，蜃氣繞粧臺。卷幔三山近，彈琴雙鶴迴。

寒影相輝，不鎖房。
玉輪玉屑，共珠珥。
月應雪，効三分白。
雪亦月，假一點光。

全

可明

簾中明月入，簾外雪花飛。
相見不知曙，翻上寢衣。

卒和雪月韻

梅龍

寒夜月如晝，宿鴉拂雪飛。
風梢空起浪，眼界瀑天衣。

全

釣雪

半窓雪四圍，拂月羽毛飛。
知是誰家上，牆頭飄白衣。

全

通敬

千里玉壺裡，滿天一鏡飛。
不知深雪色，映月襲寒衣。

全

安定

梅花枝上雪，明月夜深飛。
窓下讀書去，徘徊着客衣。
好是山房雪，清光映月飛。
一爐柴火在。

跋

此書也前年の秋余例年ぬ病枕をばく
と久しす候もゆくなりまゝに書に遊居に
幸多ぬ即年の寂寥まゝにせん高座
乃從者常しに余り好まざる様とて
目々詩箋を綴し私歌を詠し病體を
慰む余も公の語を何れ一句半云のた
む心もいづく友に獲る候をわすれず
吟箋集のよる南無かゝるいふおまへに

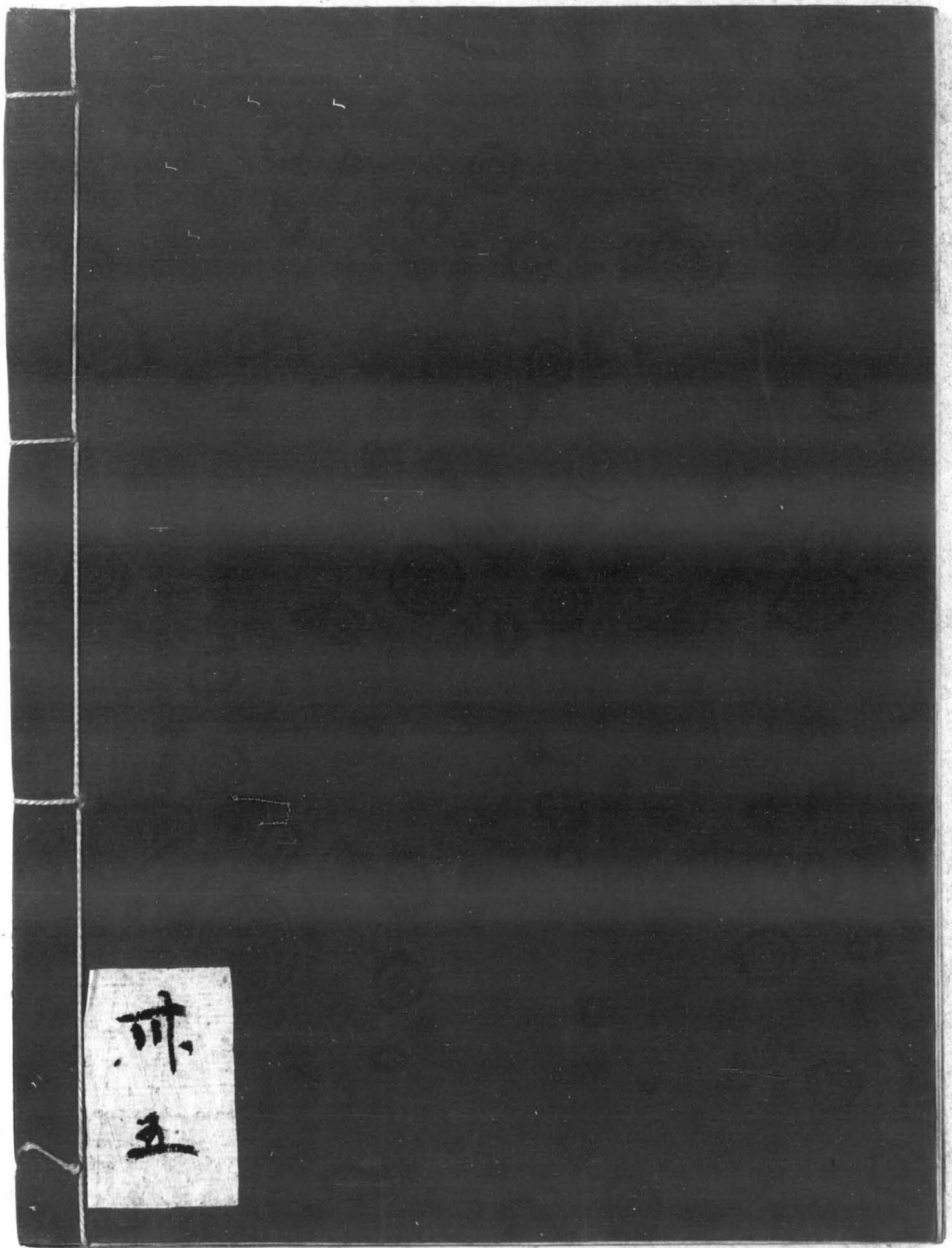


ふに初らるるを一馬にありて序の書と云ふは
いふまゝもあらぬやうに事も又そなた加へて
よき巻終に書ぬらうの事と云ふ事

庚戌の春

羅浮菴主出

九州大學圖書印



亦
五